学内研究プロジェクト（優先課題）完了報告書
（課題名：「社会・教育活動における菅茶山の福祉精神とその構造」）

人間文化学部人間文化学科　清水洋子

1、研究概要と目的
2、年度別の研究状況と成果
3、成果物
4、問題点と今後の対応
5、予算執行状況
6、総括と今後の展望

1、研究概要と目的

菅茶山が義倉や私塾などの社会・教育活動に積極的であったことはよく知られている。こうした活動には、地元の豪農たちとの親交が不可欠であったが、何よりその意志を支えたのは茶山本人の儒者としての学問思想や思索であった。しかしながら、その学問的背景・特徴はもちろん、それらが茶山の社会・教育活動にどう結びついているのかについては、茶山の名を世に知らしめた漢詩の才ほど目を向けられていない。

そこで本研究プロジェクトでは、茶山の学問的基盤を踏まえた上で、(1) 茶山の随筆等から学問的関心に根ざした日常的な思考形態に迫り、(2) 学問と日常生活の中で醸成された茶山の福祉精神がどのような経緯で社会・教育活動へと実を結んだのか、という点について明らかにしたい。

期間は 2019 年度から 2021 年度の 3 年間。この主題は、引き続き 2021 年度から他プロジェクトにおいて推進することとなっている（後述）。

2、年度別の研究状況と成果

〈2019 年度〉

この年度では、「菅茶山による経説とその傾向」を中心に資料調査等を行った。特に、茶山の経説の概要については従来研究されてこなかったため、茶山の学術思想がいかなるものかについてはほとんど知られていない。

茶山は在世時から著名な漢詩人として知られていたため、「漢詩人・菅茶山」のイメージは現代においても変わることなく継承され続けてきた。漢詩人という側面が茶山顕彰において重要な役割を果たしてきたことは間違いないが、その固定されたイメージは、同時に儒者としての茶山の姿を見えにくくしていたように思われる。江戸時代の儒者たちが自身の教学や生活の至る所において儒学思想を指針とすることは当然であるが、膨大な内容を持つ儒学経典に対する解釈や活用の仕方は儒者によって一様でない。特に、茶山の場合はその実態がこれまで研究されてこなかっ

たこともあり、茶山の学問基盤についての理解を前提とした「儒者・茶山」の姿にアプローチすることが急がれる。

『黄葉夕陽村舎詩』（児島書店）所収の『黄葉夕陽村舎文』によると、茶山の経説は以下の 5 点が確認できる。

・「誠意説」:『大学』第六章「所謂誠其意者、毋自欺也。」についての考察。
・「黙而識之説（もくしてこれをしるのせつ）」…『論語』述而篇の黙而識之説についての考察。
・「克己説」…『論語』顔淵篇の「克己復礼」についての考察。
・「浩気説」…『孟子』公孫丑上「浩然之気」についての考察。
・「性説」:『孟子』の性善説、『荀子』の性悪説を中心に「性」について考察。

これらの資料は草稿も含め複数の資料が現存しているため（広島県立歴史博物館所蔵）、調査することにより経説の成立過程を知ることができる。しかし、これら全てを一度に調査検討することは困難であるため、まずは考察対象を「浩気説」に絞ることとした。この「浩気説」は、儒家思想の概念としてよく知られる「浩然の気」について茶山が論じたものである。

以上の経緯により、本年度は「浩気説」の調査と解読のための基礎作業、成立過程の検討を通じて、儒家経典解釈時における茶山の態度とその傾向について知見を得ることに注力した。また、茶山の社会活動に関するアウトラインを把握するための関連資料収集等も行った上で、これらの成果を人間文化学部人間文化学科主催の「文化フォーラム 2019」にて発表した（「3、成果物」①）

〈2020 年度〉

当該年度では、前年度に続き「浩気説」について解読作業を深めた上で、日本語訳と注釈を付した「浩気説」概要と訳注を発表した（「3、成果物」③）。また、茶山が塾の経営や自身の生活から当時の社会や制度についてどのような問題意識を抱いていたかを知るため、「日常における茶山の思考」に対する考察も行った。その際に使用した主な資料は以下の通り。ともに、社会・教育活動へと繋がる茶山の思考形態を明らかにする上で重要な資料である。

（1）茶山が学問的観点から身近な諸事について語った「冬のこかけ」「夏のこかけ」（それぞれ『広島県史』『福山市史』に翻刻が掲載）。
（2）茶山が日常の関心事を書き連ねた随筆『筆のすさび』（『日本随筆大成』第 1 期第 1 巻（吉川弘文館、1993 年）所収のものを使用）。

これらの資料から浮かび上がってくる茶山の姿がいくつかある。一つは当時の地域社会における諸問題を解決せんと施策を巡らせ、時には奔走する姿、もう一つは儒家思想を基盤とする学問的知見を踏まえて当時の現状を憂慮し、かつそうした現状を改善へと向かわせるべく格闘する姿である。特にその傾向が強く見られる「冬のこかけ」では、儒家の伝統的理念として掲げられる「礼楽（れいがく）」が、「地域の風俗・性情」「仁政」との関連から現世においても不可欠であることを説く。その上で茶山が強調したのは、礼楽の復興と民の困窮回避であった。生活の安定なくして民衆の

道徳心や礼節への気持ちは育たないという茶山の確信は、『管子(かんし)』の言葉である「倉廩実(そうりんみ)つれば則ち礼節を知り、衣食足れば則ち栄辱を知る」はもちろん、『孟子』でも「民のごときは則ち恒産無ければ、因りて恒心無し」と語られた政治の本質でもある。

茶山が米価の問題について言及し(『筆のすさび』「旱(ひでり)米穀を不傷(やぶらず)」)、個人の範囲で備蓄した米穀を饑饉時に配給していたことからも、茶山が儒家思想の理想を掲げるだけの儒者先生ではなく、「動く思想家」であったことは明らかである。民を困窮させないためにと茶山が提示する実践的提案は、米価の変動と饑饉に対応しうる環境整備であった。そしてこうした事実は、茶山における福祉精神がいかなるものかを知る上で極めて示唆的な意味合いを持つと考えられる。

以上の内容は、茶山の論評や随筆の解読・調査を進め、茶山の思考内容の傾向を分類整理した上で得られた成果の一部である。当該年度では、これらをもとに咸宜園教育研究センター公開講座において、茶山の教学態度の一端および茶山の福祉精神発露の学問的契機について発表した(「3、成果物」②)。また、「浩気説」や『筆のすさび』の解読を通じて得た知見(神経症等の病態から当時の社会や生活の問題を分析するなど、茶山の日常の思索に迫る内容)を「3、成果物」③において紹介した。

3、成果物

本研究プロジェクトの成果物としては、以下の 3 点が挙げられる。

①「儒者・菅茶山の思想と実践―儒家思想の精粋」(福山大学人間文化学部人間文化学科主催 文化フォーラム 2019、2019 年 12 月 14 日、ふくやま文学館)
②2020 年度　咸宜園教育研究センター公開講座第 4 回「菅茶山と廉塾」(2020 年 12 月 4 日、Zoom にて実施)
③清水洋子「菅茶山「浩気説」について」(『福山大学人間文化学部紀要』第 21 号、2021.3)

①では、広島県立博物館蔵の「浩気説」の草稿資料を対象とする調査を通じて得た知見を、茶山の学問的姿勢・経説概要と併せて紹介した。また、「実践」の部分については茶山の社会活動を想定し、義倉との関わりについて紹介した。

②では茶山による廉塾開設の経緯を示し、「浩気説」の解読を紹介しつつ、茶山の教学態度の一端を示した。また、茶山が諸処に述べる「ひじり(古聖賢)」の存在に茶山の福祉精神発露の学問的契機があることも示した。この点は本研究の進展にも繋がる重要な視点である。

③は「浩気説」の概説、訳注を完備したもの。「浩気説」には草稿も含め複数の資料が現存しており、茶山の推敲過程を如実に示している。しかし、これまで関連研究がなかったことから、本稿では資料精査によって知り得た「浩気説」の成立過程を明らかにした。また、「浩気説」に書き下し文・現代語訳・注釈を加えた。

4、問題点と今後の対応

2020 年度は、新型コロナウイルスの影響により、外部機関における調査（広島県立歴史博物館所蔵の貴重資料調査等）を中断せざるを得ない状況であった。当初実施を予定していたのは、茶山が地域ネットワークにおいてどのような人物とどのような応酬を行ってきたのかを知るための書簡資料を中心とする調査であった。このことは、茶山の福祉精神が社会・教育活動へと結実する経緯を考察するためにも有益である。しかし、上記の理由によりこれらの検討事項は扱うことができなかった。

そこで、今後の方針については次のように進めたいと考えている。(1) 貴重資料については今後の状況に応じて断続的な調査を進めていくこととし、当面は現在報告者が所蔵する資料を中心に調査と解読を進める。(2) 茶山個人の思索という側面からの考察をより充実させ、その深化の度合いに応じて、茶山の知己であった西山拙斎（にしやませっさい）、茶山の弟子であった門田朴斎（もんでんぼくさい）、頼山陽など他の儒学者との関連を糸口に、当時における学問的背景へと視野を広げていく。

5、予算執行状況

本研究プロジェクトでは、実質上の予算は拠出していない。

6、総括―今後の展望

本来、この研究プロジェクトは 2021 年度を終了年度としており、その研究計画は以下の通りであった。

(1) 茶山の学問的基盤、および生活者としての茶山の思索が、当時の社会においてどのように自己の中で醸成され、またどのような形として現出したのか。この問題を考えるために、これまでの研究成果を踏まえた上で、更に当時の社会的背景や周辺環境、例えば茶山が憂慮していた神辺の風紀の問題について、『福山市史』等の関連資料からその実態を知る。

(2) (1) の調査・考察により、自身の理想や理念を学問的に追究する一方、現実としてある社会問題に具体的な方策をもって取り組もうとする茶山の福祉精神の構造を明らかにする。

しかし、本研究プロジェクトは 2020 年度をもって完了とし、今後は「備後圏域文化トレードの様相―菅茶山・井伏鱒二を軸に」(2021～2023 年度福山大学研究プロジェクト、研究代表者：青木美保）に合流することになっている。これまでの調査・考察にて得られた成果はもちろん、上記の研究計画も保持しつつ、茶山の活動を支えた福祉精神の構造についてより明確な具体像を示していく。

また、以上の点に加え、新研究プロジェクトでは次の二点についても問題設定しつつ研究を推進する。

(3) 儒者としての学問的基盤を明確な裏付けとする茶山の教育・社会活動とその思索は、同時代

の備後地域または他地域といかなる関係性を持っていたのか。

(4) 茶山の福祉精神・思想が廉塾を主とする学問的領域において醸成されたとすれば、それらはいかなる形で近世から近代へ継承されたのか。

これらの検討のためには、当時の福山藩における茶山の文化的政治的位置づけはもちろん、備後地域における社会的歴史的繋がりの中で、茶山が当時の周辺社会や後生に譲り得た資産がいかなるものであったかを考えることが必要になるであろう。2021 年度より開始する新プロジェクト「備後圏域文化トレードの様相―菅茶山・井伏鱒二を軸に」における基軸資料の中には、門田朴斎とその子である門田杉東(さんとう)の旧蔵書も含まれており、幕末から明治初期における社会と政治の近代的思惟が醸成されてゆく過程も伺える。備後地域関連資料に加えてこれらの資料を用いた研究を推進することは、従来広く認知されてきた「漢詩人・菅茶山」とはまた異なる菅茶山の姿を、後継世代との思想的文化的繋がりの中で提示することにも繋がり、新たな菅茶山研究の一端を担うものとして期待できる。